

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：14201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00520

研究課題名（和文）笑いと言魂の詩学：能狂言とアイルランド W.B. イェイツ、小泉八雲、パウンド

研究課題名（英文）Poetics of Laughter and Requiem: Noh/Kyogen and Ireland&#12316;W.B. Yeats, Lafcadio Hearn and Ezra Pound

研究代表者

真鍋 晶子（Manabe, Akiko）

滋賀大学・経済学系・教授

研究者番号：80283547

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：1）狂言の「笑い」と能の「言魂性」がイェイツとパウンドの作品に現れる様を、tragic joy, paradiso terrestreをキーワードに見極め、2）上演困難とされるイェイツの劇と、既存研究がほぼないパウンドの「狂言」の能楽公演の可能性を探り、3）悲劇・喜劇・悲喜劇というジャンル、西洋と日本という二つの境界を超えた二人の作品の現代的意義と普遍性を検証した。そこに同世代人ハーンの日愛の異界に関する見地が独自の切り口を与えた。また実演に接し役者と連携することを一支柱とし、イェイツ、ハーンの作品の新作狂言公演を国内外で企画運営した代表者の経験を発展させ、机上のみでは得られない知見を展開した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

既存研究のないイェイツとパウンドへの狂言の影響を研究し、新視点を加えた代表者の研究を発展させ、イェイツの演劇とパウンドの詩に能狂言から得たものの共存を発見、さらに既存研究がほぼないパウンドの「狂言」を分析した。内外で論文発表し、両研究に新たな知見を開いた。その過程で能楽師に聞き取り、実演困難とされるイェイツの演劇、およびパウンドの「狂言」実演の可能性を探った。コロナ禍のため新作上演はできなかったが、『猫と月』の連続再演が実現し、狂言師・主催者・観客と意見交換し、日愛の出会いで生まれた演劇の社会的意義を確認した。米教育テレビ番組や国際イェイツ協会にインタビューを受け、社会に還元した。

研究成果の概要（英文）：This study explores the following three points. 1 How in the works of W.B. Yeats and Pound two different principles that dominate Japanese traditional comedy of kyogen and tragedy of Noh exist simultaneously: "laughter" in kyogen and "praying for repose of the dead soul" in Noh, with Yeats's tragic joy and Pound's paradiso terrestre as key concepts. 2 Yeats's plays have been regarded to be hard to be put on stage while there has been almost no previous study on Pound's "kyogen." The possibility to perform their plays has been explored through the collaboration with Noh and kyogen actors. 3 Contemporaneity and universality of their works have been confirmed by proving how they cross the two existent borders; distinction of dramatic genres of tragedy, comedy and tragi-comedy on one hand and boundary between the Western world and Japan on the other. Here Hearn's insightful observation into the Japanese and Irish notion of the other world gives a fresh point of view.

研究分野：英米アイルランド文学研究

キーワード：W.B. イェイツ エズラ・パウンド ラフカディオ・ハーン 能狂言 詩学 笑い 言魂 境界

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 既存研究：W.B.イェイツ、エズラ・パウンド、アーネスト・フェノロサ、伊藤道郎と能

イェイツは、700年の英国支配が抑圧したアイルランド文化への国民の誇りを回復する劇の上演を目指した。創作の行き詰りへの突破口が能楽(以下、能狂言を総称して「能楽」と呼ぶ)であった。フェノロサによる能楽覚書をパウンドが翻訳してイェイツに伝え、そこへ舞踊家伊藤道郎が貢献などイェイツと能に関する既存研究は多く存在する。

(2) 研究代表者の既存研究：狂言、笑いといェイツ、パウンド、ラフカディオ・ハーン

狂言：イェイツ、パウンドが狂言として書いた作品があるにも拘らず、狂言に関する研究がほぼ存在しないことに着目し、国内外で(i)(ii)を行った。

(i) 論文発表

その結果、招聘講演、基調講演、また、国際的学術誌への投稿を依頼された。

(ii) 狂言の名家大蔵流茂山千五郎家による公演

イェイツとハーン作品に基づく狂言を9公演企画・実施(アイルランド3公演を含む)。その結果、狂言が国内外のイェイツ研究で認知された。

笑い：2015年国際イェイツ協会での狂言に関する論文発表をきっかけに、「笑い」と結び付けられることが少ないイェイツと笑いをテーマに2018年京都で国際学会を開催し成功させた。

異界：能楽、イェイツ、パウンド、ハーンに通底する異界研究を着手した。

2. 研究の目的

・イェイツとパウンドの作品に、狂言の「笑い」と能の「鎮魂性」の双方が現れている点を検証。これがイェイツ後年の「悲劇的喜び(tragic joy)」、パウンドがライフワーク『詩章(*Cantos*)』で描いた「現世の楽園(*paradiso terrestre*)」という二人の詩学・哲学の根本と繋がることを証明。

・上演困難とされるイェイツの劇、既存研究がほぼないパウンドの「狂言」(『婚姻の慰め(*The Consolations of Matrimony*)』)と『主人公(*The Protagonist*)』の狂言公演の可能性を探る。これは、両者の現代性と普遍性を検証することになる。

(1) 既存の境界～悲劇(tragedy)・喜劇(comedy)・悲喜劇(tragi-comedy) & 西洋・日本～を超えた新しい演劇

能との邂逅で生まれた『鷹の井(*At the Hawk's Well*)』、狂言との邂逅による『猫と月(*The Cat and the Moon*)』には、それぞれ能(悲劇)と狂言(喜劇)の特徴が見られるが、後年の作品に能と狂言、また日本と西洋の演劇原理が共存する独特のジャンルが構築されていると検証する。

(2) Tragic Joy と *paradiso terretre* 能の鎮魂と狂言の笑い

上記既存の枠組みを超えた演劇と『詩章』には、二人の哲学・詩学の根本にある tragic joy と *paradiso terrestre* が実現されている。そこへ「間」、「空」、「無」を導入し、両者が西洋と日本の空間観や世界観の差異を超えていると検証する。

(3) *Certain Noble Plays of Japan, Classic Noh Theatre of Japan* と原作の能

正式な能楽指導を受けたことがないイェイツとパウンドだが、その真髄を掴み創作に生かした。原作の能とパウンド訳を検討する。文献・資料研究、能楽観劇、能楽師(シテ方、ワキ方、狂言方、囃子方)の聞き取り。能楽を指導した画家久米民十郎は未発掘の部分が多く、研究する。

(4) 現代性

能楽との邂逅によるパウンド、イェイツの作品が、日本人の想像力・創造力を掻き立て、新たな作品が創出された。『鷹の井』を能に書き換えた横道萬里雄の『鷹姫』が上演され続け、厳格なきまりのもと伝統が継承される能楽に新しい方向を生んでいる。また、代表者の企画によるイェイツ、ハーン作品に基づく狂言公演は国内外で受け入れられた。このように東西邂逅で生まれた作品が、新たな東西の邂逅を生み

続ける意義も解明。

(5) 独自性

狂言の笑いをイエイツ、パウンド研究の切り口とした独自性ゆえに、代表者の研究が国際的に認められた。能に偏っていた既存研究に見られなかったものを本研究がさらに炙り出す。また、代表者の研究は、能楽や朗読公演の企画運営に関わるため、能楽師他の古典芸能関係者、俳優、音楽家などの上演関係者と演技や上演に関し議論できる。実演の機会も探る。これは文学研究を実体化する独自の強みであり、かつ創造活動に直結する。

3. 研究の方法

本研究はコロナ禍による計画実施の変更を余儀なくされた。初年度の国内外での学会は中止、海外での調査・資料蒐集は不可能となった。徐々に状況が緩和された2、3年目も、京滋を超えた移動は難しく、オンラインで再開された学会・研究会に参加、成果発表した。このような状況のため、研究期間延長。対面では、最終年度に国際学会での成果発表を再開した。

(1) 図書・研究環境整備

書籍、基礎資料、機器の充実。オンラインによる研究・成果発表・会議参加を可能にする環境整備やデジタル図書への支出が予定よりも多くなった。

(2) 資料蒐集

コロナ禍のため、イエイツの草稿を管理する代理人から許可を得たアイルランド国立図書館、また他のアイルランド・アメリカの図書館での資料蒐集には行けず、インターネットでできる限りで行った。2022年まで、国内移動にも制限があり、京滋中心に能楽関係の資料蒐集を行なった。2023年には移動が可能となり、久米民十郎の作品や個人資料を管理する神奈川県立近代美術館で調査、また開始時に想定しなかった賀川豊彦とイエイツという、未知の事実を研究するために、賀川豊彦松沢資料館との連携も行った。海外出張が可能となり、ストックホルムでの学会の際、ノーベル賞とイエイツに関する資料を蒐集した。

(3) 国内外の学会発表および研究交流

韓国、英国、スウェーデン、日本などを拠点に開催されたオンラインおよび対面の国際学会で論文発表を重ねた。国際学会での論文発表の結果、アイルランド、アメリカ、英国の大学出版局から出版された学術誌や学術書に論文が掲載された。また国際イエイツ協会企画の『猫と月』についてのインタビューが同協会のホームページで公開された。このように学会での成果発表が新たな研究を導いた。

(4) 能楽師など伝統芸能関係者への聞き取り

2021年からオンラインや制限のもとで実施された能楽公演を鑑賞し、また能楽師の聞き取り調査を行った。特に大蔵流狂言茂山千五郎家の狂言師、観世流シテ方能楽師の協力を得た。演技や公演現場を知る演者とのやり取りは本研究の特殊性をうんだ。2022年夏、『猫と月』の連続公演（北海道3ヶ所）に同行、セリフや演技を調整する過程に参加し、作品解釈に新しい視点を得た。また、パウンド、イエイツに影響した能の作品（特に『景清』）の登場人物が他の伝統芸能に扱われていることに着目し、さらなる研究へと発展するため、予定外の文楽や落語関係者への聞き取りを行った。

4. 研究成果

イエイツの演劇と能楽、パウンドが狂言として書いた戯曲を中心に国内外で論文発表、また、学術書や学術誌に論文を出版。同時に、一般向け公開講座で講義、また、学術的だが研究者以外の読者層も想定した小論も発表し、研究の社会還元をした。さらに、イエイツと関わり、また海外で認知度が上がりつつあるハーン研究を加えることで、イエイツ研究に新たな光をあてた。加えて、本研究では扱う予定のなかった、ヘミングウェイの未発掘分野である詩（パウンドの影響が大きい）に関しての旧論文が学術書に再出

版され、さらに新論文を依頼され別の学術書に出版（パウンドの詩学に加え、アイルランド出身のチンク・ドーマン＝スミスについて論じ、代表者のアイルランド研究が活かされた）、米国教育番組 PBS 製作のドキュメンタリーに出演、それが DVD 化されるなどヘミングウェイが代表者の研究に新たな光を当てる可能性が出た。また、賀川豊彦とイエイツについての発見、また久米民十郎とパウンドについては、今後の研究に発展できる。

以下、研究内容を概括する。

(1) イェイツと能楽～笑い と 鎮魂

狂言-笑い

イエイツが狂言として書いたと言う戯曲『猫と月』研究は継続し、国際イエイツ協会発行の学術誌に論文が掲載された。さらに、その学術誌の編集長が『猫と月』に関する対話を企画、それが協会サイトにあげられ、『猫と月』と狂言の関係を国際的に周知させる一助となった。また、イエイツ、フェノロサ、ハーンの関係、作品の舞台化に関する論文がイエイツとアジアを扱うコーク大学出版局による学術書に掲載され世界に発信された。

コロナ禍で延長し、本研究と同時進行した前科研を総括する『猫と月』に関する研究会を開催、その報告書・冊子を本研究の出発点とした。

狂言による『猫と月』国内再演に同行し、狂言師とやり取りし、実際の舞台に接して得た新たな知見を論文に盛り込んだ。今後も公演の実施を計画し、机上のみでは得られない知見を展開する。

『猫と月』狂言版を監督した狂言師の『猫と月』上演論が、上記コーク大学出版局出版の学術書に掲載され、その英訳を担当、その過程で本作品の狂言性についての理解を深めた。

狂言と能の共存 笑い と 鎮魂

イエイツの演劇、特にアイルランドの神話上の英雄クー・フリンを主人公とする一連の演劇に、狂言と能楽の原理が共存することを「笑い」と「鎮魂」をキーワードに検討した結果、イエイツにとっての聖性、周縁に生きるもの、殉教という新たなテーマが浮上し、この点を IASIL JAPAN 国際大会（オンライン）、韓国主催の国際イエイツ協会（オンライン）、韓国イエイツ協会大会（オンライン・招聘）、日本愛協会年次大会におけるシンポジウム、およびストックホルム開催の国際イエイツ協会での論文発表した。日愛協会シンポジウムでの論文要旨を学会誌に掲載、イエイツの英雄の聖性と周縁者研究に発展させる一歩を記した。これらをまとめた論文を国内外の学術書や学術雑誌に投稿予定である。

世界の一線活躍する 40 名の研究者が寄稿する *The Oxford Handbook of W.B. Yeats* にイエイツと能狂言に関する代表者の論文が掲載され、本研究成果を世界に示した。本論文に特別な意味があったため、ストックホルムでの国際イエイツ協会での本書に関する Round Table の登壇者になることを依頼され、本研究の成果がさらに周知されイエイツの能楽への影響も紹介し反響を得た。

(2) パウンドと狂言～笑い

イエイツと能の出逢いによる第 1 作『鷹の井』初演の際に、狂言として上演しようとパウンドが書いた劇についての既存研究はほぼ存在しない。代表者の狂言とパウンド研究に基づき、日本英文学会のシンポジウム（オンライン、企画構成含む）、ヨーク大学での国際イエイツ協会（ハイブリッド）、京都主催の国際パウンド学会（オンライン）さらに日本イエイツ協会と日本パウンド協会の合同学会のシンポジウムで、国内外のパウンド・イエイツ研究者に問いかけた。結果は日本イエイツ協会・日本パウンド協会の学術誌に英語論文として掲載され、また、国際パウンド協会が現在作成中の学術書に投稿中である。本作品の実演可能性を、狂言師と検討し続ける。パウンドの劇を日本語に訳することも今後の研究課題とする。

(3) パウンドの『詩章』と笑い、鎮魂、さらに『景清』

パウンドのライフワーク『詩章』、特に『ピサ詩章』に狂言の「笑い」と能の「鎮魂」が共存すると見出し、上記日本英文学会シンポジウムで発表し、proceedings にまとめた。パウンド自身の英訳がある能『景清』の重要性に気づき、死に近い悲劇の武将（鎮魂性）を主人公とする能『景清』の『詩章』での扱われ方に絡む「笑い」をパウンド訳『景清』や文学伝統と絡めてエディンバラでのパウンドの国際学会で論文発表し、本研究の総括とすると同時に次期研究テーマを繋いだ。また、景清は他の伝統芸能（歌舞伎、文楽、落語など）でも繰り返し扱われるテーマである点に着目して新たな研究を始めた。この結果も含むパウンドにおける景清とイエイツにおける盲人をまとめた論文を学術誌に投稿する予定である。

(4) ラフカディオ・ハーン

日本とアイルランドの「異界」「聖なるもの」に独特の観点を示すハーンは本研究に独特の切り口を与える。イエイツとの交渉もあり、イエイツも作品内で言及するハーンとイエイツの関係、またその作品の狂言化と朗読公演についてまとめたものが、コーク大学出版の日本とアイルランドを扱う学術書に掲載され、国際的には認知度が低いハーンを世界に発信、今後も継続研究する。

(5) アーネスト・ヘミングウェイ

ヘミングウェイ研究に関しての成果が再評価されたことは「2.研究方法」に述べたとおり。さらにアメリカの有名なドキュメンタリー製作者から受けたインタビューが教育テレビ局 PBS により放映され、さらに DVD 化され研究成果周知に役立った。また、パウンドが関わった *transatlantic review* 誌に関する日本ヘミングウェイ協会大会シンポジウムで論文発表したように、パウンドの詩学研究と関わるヘミングウェイ研究も継続する。本口頭発表に基づく論文が 2024 年度出版される。

(6) 久米民十郎・賀川豊彦

イエイツやパウンドの同時代人である二人と両者の影響関係には、研究の余地が多々認められる。久米に関しては *The Oxford Handbook of W.B. Yeats* にまとめ、次期研究での国際シンポジウム発表に引き継いだ。賀川関係者にも知られていなかったイエイツとの関係の発見は驚きを持って受け入れられた。賀川は『猫と月』、イエイツと聖者に関わるテーマに繋がり、研究継続する。

(7) その他

International Yeats Society、日愛協会、日本イエイツ協会、IASIL JAPAN、日本ヘミングウェイ協会、日本エズラ・パウンド協会の事務局・理事・委員・編集委員として学会の企画・運営を行い、様々な研究者と交流し、最新の研究動向を常に追っている。公開講座や狂言公演で研究の成果を一般に還元する機会ももった。

(8) 継続

2023 年国際イエイツ協会での論文発表から 2024 年ベルギー開催の学会での論文発表を促され行うことになった。2023 年パウンドの国際学会運営の中心であったニューオーリンズ大学の研究者の日本での連続講義を他大学の研究者の連携で決定・実施したが、本連続講義は本研究の総括であると同時に、2024 年度の『猫と月』狂言上演とシンポジウム、また MLA でのシンポジウムでの論文発表という、次期研究への継続を生み出した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Akiko Manabe	4. 巻 5-1
2. 論文標題 “Are you that flighty?” “I am that flighty.”: _The Cat and the Moon _ and _ Kyogen_ Revisited	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 International Yeats Studies	6. 最初と最後の頁 53-70
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 真鍋晶子	4. 巻 36
2. 論文標題 ウィリアム・バトラー・イェイツの「聖者」と賀川豊彦	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 雲の柱	6. 最初と最後の頁 87-99
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 真鍋晶子	4. 巻 8
2. 論文標題 笑い と 鎮魂 の 詩 学 _pardiso terrestre_ と tragic joy	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本英文学会第93回大会(2021年度) Proceedings	6. 最初と最後の頁 1-3
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 真鍋晶子	4. 巻 1
2. 論文標題 近江と能狂言: 湖東湖北をめぐる	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 近江・湖東ゴーストハンティング	6. 最初と最後の頁 12-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 真鍋晶子	4. 巻 27
2. 論文標題 ハーンと漢字	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 石仏：ハーン通信	6. 最初と最後の頁 25-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Akiko Manabe	4. 巻 26
2. 論文標題 Kyogen for Yeats and Pound	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Ezra Pound Review	6. 最初と最後の頁 33-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Akiko Manabe	4. 巻 54
2. 論文標題 Kyogen for Yeats and Pound	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 イエイツ研究	6. 最初と最後の頁 33-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計22件（うち招待講演 6件 / うち国際学会 12件）

1. 発表者名 Akiko Manabe
2. 発表標題 Pound's _kyogen_, _The Protagonist_
3. 学会等名 The 29th Ezra Pound International Conference (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 真鍋晶子
2. 発表標題 ケルト神話と口承伝統
3. 学会等名 第23回斎宮セミナー（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Akiko Manabe
2. 発表標題 Friendship and Sacredness in Yeats ' s Drama
3. 学会等名 2022 International Yeats Society International Conference（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Akiko Manabe
2. 発表標題 _Kyogen _for Yeats and Pound
3. 学会等名 第58回日本イエイツ協会・第43回日本エズラ・パウンド協会合同大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 真鍋晶子
2. 発表標題 W.B. イエイツにおける聖なるものと殉教
3. 学会等名 日本アイルランド協会アイルランド研究年次大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Akiko Manabe
2. 発表標題 Yeats Conversation with Rob Doggett, _ The Cat and the Moon_
3. 学会等名 Yeats Conversation, International Yeats Society (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 真鍋晶子
2. 発表標題 生を極める旅を続けた研究者、高橋哲雄先生
3. 学会等名 第49回関西アイランド研究会例会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Akiko Manabe et al.
2. 発表標題 An Interview
3. 学会等名 Hemingway: A Film by Ken Burns and Lynn Novick (PBS Documentary) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 真鍋晶子
2. 発表標題 舞台をめぐるアメリカ、アイランドと日本：伝統と革新を再考する
3. 学会等名 日本英文学会第93回大会シンポジア第8部門
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 真鍋晶子
2. 発表標題 『猫と月』のアイランド性と普遍性～能狂言をめぐる
3. 学会等名 第46回 関西アイランド研究会「W.B. イエイツ『猫と月』(The Cat and the Moon)をめぐる」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Akiko Manabe
2. 発表標題 W.B. Yeats 's Revolution and Resolution through his Encounter with _ Nohgaku_
3. 学会等名 The 37th International Conference, IASIL JAPAN (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Akiko Manabe
2. 発表標題 W.B. Yeats 's Encounter with Japanese Traditional Theatre of _Noh_ and_ kyogen_
3. 学会等名 2021 Yeats International Conference in Commemoration of 30th Anniversary of the Foundation of the Yeats Society of Korea in 1990 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Akiko Manabe
2. 発表標題 Literary Friendship in England: Ezra Pound 's _kyogen_, _The Protagonist_
3. 学会等名 International Yeats Society Biennial Conference: Yeats and English (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Akiko Manabe
2. 発表標題 Pound's _kyogen_, _The Protagonist_
3. 学会等名 29th Ezra Pound International Conference (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Akiko Manabe
2. 発表標題 Friendship and Sacredness in Yeats's Drama
3. 学会等名 2022 IYS International Conference: New Yeats Studies: Memory, Consciousness, Comparative World Literature, and Technology in Poetic Discourse, Korea (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 真鍋晶子
2. 発表標題 W.B. イエイツにおける聖なるものと殉教
3. 学会等名 日本アイルランド協会アイルランド研究年次大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Akiko Manabe
2. 発表標題 Revolution and Resolution in Yeats's Poetry
3. 学会等名 IASIL Japan (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 真鍋晶子
2. 発表標題 『猫と月』再考
3. 学会等名 関西アイランド研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 真鍋晶子
2. 発表標題 笑いと鎮魂の詩学 paradiso terrestreとtragic joy
3. 学会等名 日本英文学会第93回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Akiko Manabe
2. 発表標題 Blindness and Light in Pound's paradiso terrestre--another study of Noh in the Cantos, especially Kagekiyo
3. 学会等名 The 30th Ezra Pound International Conference (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Akiko Manabe
2. 発表標題 Sacredness, Heroism and Laughter in Yeats's Drama
3. 学会等名 International Yeats Society (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 真鍋晶子
2. 発表標題 『トランスアトランティック・レビュー』を読み解く
3. 学会等名 日本ヘミングウェイ協会全国大会（第33回大会）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 Akiko Manabe, Matthew Campbell, Lauren Arrington et.al	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Oxford University Press	5. 総ページ数 752
3. 書名 The Oxford Handbook of W.B. Yeats	

1. 著者名 真鍋晶子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 真鍋晶子	5. 総ページ数 55
3. 書名 日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(c) JP17K02542 W.B. イエイツ、パウンド、ヘミングウェイと狂言：「笑い」と「間」の詩学 報告書 W.B. イエイツ『猫と月』(The Cat and the Moon)をめぐって	

1. 著者名 真鍋晶子、小笠原亜衣、島村法夫、他（日本ヘミングウェイ協会）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 小鳥遊書房	5. 総ページ数 490
3. 書名 ヘミングウェイ批評 三〇年の航跡	

1. 著者名 真鍋晶子、辻秀雄、今村楯夫、他（日本ヘミングウェイ協会）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 小鳥遊書房	5. 総ページ数 352
3. 書名 ヘミングウェイ批評 新世紀の羅針盤	

1. 著者名 Akiko Manabe, John A. FitzGerald Richard J. Kelly Claire Connolly, Hiroyasu Fujisawa et al.	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Cork University Press	5. 総ページ数 468
3. 書名 Crossings: Celebrating Sixty Years of Diplomatic Relationships between Ireland and Japan	

1. 著者名 位田隆一、青柳周一、真鍋晶子（編）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 サンライズ出版	5. 総ページ数 288
3. 書名 世界遺産学への誘い	

1. 著者名 Akiko Manabe, Sean Golden et al	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Cork University Press	5. 総ページ数 372
3. 書名 Yeats and Asia: Overviews and Case Studies	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
韓国	Dongguk University			
米国	SUNY, Geneseo	University of New Orleans		
フランス	Sorbonne Nouvelle			
アイルランド	University of Limerick	University College Cork	Maynooth University	
英国	University of York			
ノルウェー	Universitet i Agder			
スペイン	Universitat Autònoma de Barcelona			
ベルギー	KU Leuven			